

観 音

平成2年1月

第12号
年2回発行
発集発行

小出真行



うかうかと時を過すのも

一路向上するのも

皆心のあり方に依る

五部陀羅尼問答偈讚宗秘論

としとれば
(五)

くどくなる

気短かになる

グチになる

でしゃばりたがる

世話やきたがる

仙崖・老人六歌仙



そうですね。人というものは年をとるにつれて一つものを言うのも少しづつくどくなりがちになってきますが、そんな時は周りの人に嫌がられないようになるべくサラリと語りましょう。短気が出そうになったらもう一度ゆっくり考えてみましょう。

お釈迦さまも

「グチが出たら殺せ、グチを殺せば安楽になるぞ」と教えています。

そして、人の世話をやくのもほどほどにして、家の中のお内佛（佛壇）の前に出て、お内佛のお世話をしましょう。そうすれば、佛さまもきっと「ようこそ、ようこそ」と喜んで慈悲の眼を向けられるに違いありません。そうすれば心も落ちついて気持も豊かになるでしょうね。

し、孩児、孩女は幼児、幼女を指し、嬰子、嬰女は出産直後の乳幼児を指し、水子は死産、流産児に用いられています。

最近、こうした戒名はお金で買うものと誤解されるむきもあります、あくまでも本来の意味を充分にお知りおき下さい。

手



両手の手の平のシワとシワを、顔の前で合わせてみて下さい。不思議なことに何となく落ちついた気分になってきませんか。だから、シアワセというのです。では今度は反対に、手の甲と甲、つまり背中合わせに合わせてみて下さい。きつと、指のフシとフシがゴッゴツて、びたりと合わないでしょう。だからそれを「フシアワセ」といいます。

シワとシワを合わせるから幸せと言いましたが、それは冗談でも何でもありません。人間誰しも、仲の良い時はお互いに正面から向かい合って話に大いに花を咲かせますから幸せですが、逆に仲の悪い時は背中を向けあって顔を見るのも嫌になりろくに話をしませんから、これではやはり不幸せで

しょう。

従って手と手を合わせる。つまり合掌することは、こうした心の状態でありたい。このような幸せな家庭、社会でありたいという願いと祈りがあるはず。ですから合掌は、単なる形式だけのものではありませんし、神佛を拜む時だけのものではなく、はならないのです。大事なことは、その合掌の心を普段の生活の中に生かす努力をすることだと思えます。

さて、この両手ですが、右手と左手があらまして、それぞれ役目が違っていることにお気付きでしょう。例えば、食事の時は右手で箸を持てば、左手で食器を持ちますし、写を書く場合、右手で筆やペンを持てば、左手は紙を押える役目を担当します。この異った同士がピタリと一つになった時こそ、初めて「和」が生まれてくるのです。だから合掌のままですと喧嘩もできません。合掌することによって落ち着きを取り戻すこともできますし、息を整えることもできます。ということは、合掌は「平和のシンボル」だといっても決して過言ではないでしょう。

更に、この手はいろいろな役目をいたします。例えば、子供を誉めたりする時は、

やさしい笑顔で「よくやった。」と手で頭をなでたりしますし、逆に叱る時は手で愛のムチを使ったりするでしょう。痛いところは手でさすり、かゆいところは手でかいたります。さらに、挨拶がわりに握手もしますし、ハンコがない時は、拇印といって親指がハンコの代わりにしますが、もつとも足の拇印は受けつけてくれません。物を作り出すのも仕事をするのも、ほとんど手が中心となりますので、私たちが生活を営む手段は何といっても手が主役でしょう。ですからこの手は「自分の代表」でもあり「身代り」なのです。

その証拠に「手」のつく言葉は多いですね。思いつくままにあげてみますと、踊り手、歌い手、話し手、聞き手、相手、働き手、追っ手、やり手、もらい手、決まり手、決め手、攻め手、取っ手、切手、……。こんなに沢山あるのです。でも、ロツテ、アサツテ、シアサツテなどは違います。これだけ並べてみただけでも、いかに手は自分の主役であり、代表であるかわかると思えます。

けれどもどうも私たちは、人前で合掌をするには気がね、てらい、ためらいが邪魔しますし、他人の批評に神経質になりがち

になります。でも勇気をもって生活の一部として合掌を取り入れたいものですが、えてして千差万別「必要性がない」とか「宗教教育だ」とかいつて、すぐ物ごとをねじ曲げて考えたがる片寄った考えの人がどこの世界にもいるもので、そんな人は心も視野も狭く、天邪鬼みたいな哀れな人だと無視すればいいのです。ですがそんな人でさえも試験の時とか、病気で困った時、あるいは試合がエキサイトした時など自然に合掌しているからおもしろいですね。

要するに合掌は理屈や理論ではありません。人間が一番人間らしい自然の姿なのではないでしょうか。

まあとにかく、皆様も理屈抜きにして食事の前後の合掌から始めてみてはいかがですか。

さて、この「手」について、佛教詩人の坂村真民先生の味わい深い詩がありますので紹介します。

両手の世界

両手を合わせる	両手でにぎる
両手で支える	両手で受ける
両手の愛	両手の情
両手合わしたら	喧嘩もできまい
両手で持ったら	こわれもしまい

一切衆生を 両手に 抱け

どうですか、何となく手のありがたさが少しおわかりになりましたか。どうぞ心をこめて大切に動かしてみてください。

よいことを



この世の中はおかしいもので、社会でいくら新聞紙上を賑やかすような悪い行動をしても立派な地位につき裕福な生活をしている人もあれば、地道にこつこつと努力しても報われず不運な生活を続けている人もいます。

しかし、それは一時的な姿であって継続的に続くものではありません。佛教では因果応報を説き、必ず原因があってこそ結果が現われてくるものと説いているのです。

むかしの諺に

「桃栗三年、柿八年、梨子の馬鹿めは十年」

といわれていますように、人間の社会でも、今月、善いことをしたから直ちに、明日良い結果があらわれ、又、逆に悪いことをしても直ちにあらわれるものではありません。

せん。このことを伝教大師が発願文に「因なくして果を得る。このことわりあることなし、善なくして苦を免れる。このことわりなし」といつておられます。

佛教は過去、現在、未来を通じて因果の理を説いているのです。人間、誰しもが今晩死ぬと知っている者はいませんが、しかし、死ぬかもわかりません。ただ死なないものと思つて明日という未来を夢みて生活しているのです。

この世の社会で悪いことをして、現在は立派な生活をしていても、やがて未来では悪い結果となって報いが生じるのが当然であります。未来とは、明日か、一年、十年先か、又死後の世界かわかりませんが、ただ言えるのは、未来とはやがてくる自分の将来という意味でもあるのです。それは、自分の代か、子の代か、又は、孫の代かさてさて………。

と考えますと、やはり悪いことは出来なものです。

